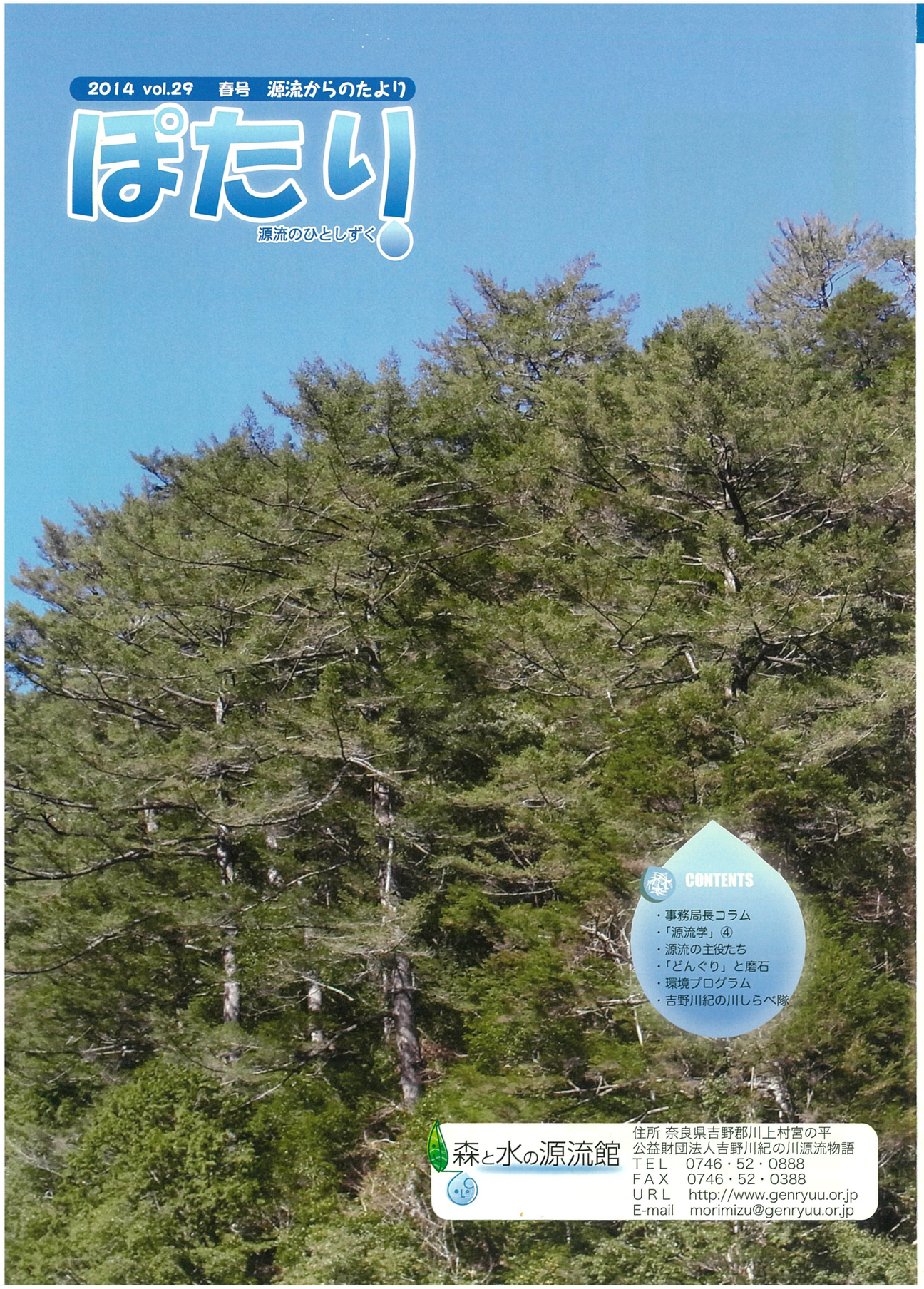
2014 vol.29　春号　源流からのたより

ぽたり

源流のひとしずく



CONTENTS

・事務局長コラム
・「源流学」④
・源流の主役たち
・「どんぐり」と磨石
・環境プログラム
・吉野川紀の川しらべ隊

森と水の源流館
住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
公益財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL　0746・52・0888
FAX　0746・52・0388
URL　http://www.genryuu.or.jp
E-mail　morimizu@genryuu.or.jp

吉野川紀の川しらべ隊　ドングリをしらべよう！

1月30日、企画展「どんぐり」（10／18～12／16）の関連行事「ドングリをしらべよう」を橿原神宮で開催しました。講師は奈良植物研究会の横山和志朗先生で、23名が参加しました。

一口に「ドングリ」といいますが、「ドングリ」はクリを含むブナ科植物の果実の総称です。クリは各地で栽培されていますが、食用に向かないクヌギ・コナラなどの「ドングリ」のなる木も薪炭材として利用・管理されていたため、今でも国土の2～3割が「ドングリ」林で占められています。

「ドングリ」は県内で20種類ありますが、橿原神宮では14種類見ることができます。一般的な森林ではせいぜい数種類ですので、そのすごさが分かります。

なぜ神宮で多く見られるかというと、昭和15年（1940年）の拡張・整備に際し多くの苗木が植えられたからです。それまで一帯は集落や水田が広がっていました。苗木が植えられて70年間、丁寧に守り育てられた結果、現在のような鬱蒼とした豊かな「ドングリ」林となりました。

当日は森を散策しながら「ドングリ」観察を行いました。横山先生から種類や特徴を教えてもらい、種類ごとにカードを作り、袋に入れていきました。昼休みにはドングリ笛の作り方を教わりました。

「ドングリ」のような身近な自然に目を向けることで、人と自然との関わり・共生を考えるきっかけとしていきたいものです。

境内を歩いてドングリを探しました。

先生にドングリの見分け方を教えてもらいました。

※当日見つけた「ドングリ」
アラカシ・シラカシ・シリブカガシ・イチイガシ・アカガシ・ツクバネガシ・ウバメガシ・スダジイ・ツブラジイ・マテバシイ・ナラガシワ・クヌギ・コナラ・クリ

源流人会の活動　山の神まつりと杉玉づくり

森と水の源流館では、1月、6月、11月の7日に三之公山の神（※）をお祀りしています。しかし、林業従事者の減少、過疎高齢化などといった理由から、山の神をお祀りしなくなった地域も少なくないそうです。源流学の森づくりは、森の再生への取り組みと同じく、川上村の先人たちの森に暮らしてきた知恵や工夫を体験し、それを伝えることも目的の一つです。今回は多くの方が参加できるよう、11日に再度お祀りしました。山と里と海の幸を供え、祝詞を上げ、玉串を献上し、みんなで参拝しました。この機会に山の神に限らず、身近な神様を訪ねてみるのもいいかもしれません。

昼食にお下がりの餅を雑煮でいただき、続いて、杉玉づくりに取りかかりました。杉玉も元々は酒の神様に感謝を捧げるものだったそうです。竹を編んだ芯にスギの葉っぱをぎゅっぎゅっと差し込んでおおよそ球体を作りました。直径20cmほどの芯で、30年生の杉の葉っぱを全部使うくらい、かなり大きく重くなりました。これをまん丸の形に刈って完成ですが、日が陰り寒くなってきたので作業はいったん終了、後日、森と水の源流館の職員が仕上げました。杉玉は森と水の源流館（天明の家）にて展示しています。

※三之公山の神について、詳しくはぽたり28号p2「源流学」をご参照ください。

多くのボランティアさんでお祀りしました。

杉玉

源流人募集

源流人とは
かけがえのない水を生む
源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは
集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、
参加し、喜びを分かち合いながら、
源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

年会費
個人　2,000円
家族　3,000円
学生　1,000円
団体　10,000円

郵便振替 00940-1-331163

水源地の森守募金（もりもり）にご協力ください

ありがとうございました。
平成24年度、378,937円の森守募金をお預かりしました。
奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。
今後ともご支援をよろしくお願いします。

郵便振替 00950-2-331164「水源地の森守募金」あて

「表紙の写真：三之公トガサワラ原始林（国指定天然記念物）」

発行日:平成26年3月発行
発行所:公益財団法人吉野川紀の川源流物語　森と水の源流館
TEL:0746-52-0888

「第5回　全国源流サミットｉｎ奈良県川上村」への始動にあたり
～全国源流の動き～

公益財団法人　吉野川紀の川源流物語　事務局長　尾上　忠大

当財団としては、あまり大きな動きがなかったこの時期の誌面を利用し、全国の源流による動きについて紹介したいと思います。

平成17年11月、全国各地の河川の最上流部に位置する自治体により「全国源流の郷協議会」が発足しました。これには現在（平成26年2月）16の市町村が加入しています。

かけがえのない水や森林などの源流資源を流域の視点に立って、源流に暮らす人と源流の恵みを共有し享受する人たちが協働して保全することをめざし「参加・連携・協働の源流の郷づくり運動」を展開することとしています。加入町村を巡り毎年開催される「全国源流サミット」はその一環で、今年9月5日（金）から7日（日）にわたり、川上村を舞台に開催されます。読者のみなさまも、ぜひご参加ください。

次年度源流サミット開催地への会旗の伝達（川上村栗山村長）

そして、この「源流サミット」の議論から提案された『源流白書』の作成が進んでいます。源流地域では、急速な少子・高齢化、古来より培われてきた歴史や文化の消滅、森林の荒廃などの危機が迫っていますが、それは源流だけのことではなく国土の危機であり、都市部に住む人々にとっても大変な事態になることをより身近な問題として提起する内容としてまとめられていくようです。

さらにこの『源流白書』の必要性を事前に訴えかける動きとして、今年度3つの河川の源流とその流域での活動をテーマに、「源流フォーラム」が順次開催されました。多摩川（源流：山梨県小菅村）編は12月に川崎市で、木曽川（源流：長野県木祖村）編は1月に名古屋市で、そして吉野川紀の川（源流：奈良県川上村）編はトップをきって11月に和歌山県九度山町で実施されました。

吉野川紀の川源流フォーラムの様子

他の2つの河川が下流部の大都市で行われたのに対し、吉野川紀の川編は中流部での開催となりました。私たちの場合、他と比較すると、決して大都会とを結ぶ河川ではないことを前提に協働の意味を考えることも大切であることが見えてきます。それもあって当流域のフォーラムでは、パネルディスカッションにおいて、源流域で木材業、樽丸製造を営む春増薫氏、中流域で農協の組合長として環境保全型農業を推進する宇田篤弘氏、河口域で漁業に従事する高井宏氏が立ち、それぞれの視点から見える環境の変化を述べ、立ち位置の確認や連携の可能性について意見交換が行われました。1本の河川でつながる林・農・漁の第一次産業、それぞれは古くからあるものの、これまで意外となかった新鮮な〝くくり〟と感じると同時に、やはり吉野川紀の川での連携において重要とすべきテーマであるに違いありません。

全国源流の郷協議会

9月の源流サミットでは、このような全国の源流の動きとおもいを届けられるよう、さぁ、これから知恵をしぼり、汗をかきたいと思います。

森と水の源流館の環境教育プログラム

環境教育とは

環境教育の目標は、「環境とそれに関連する諸問題に気づき、関心を持つとともに、現在の問題解決と新しい問題の未然防止にむけて、個人および集団で活動するための知識、技能、態度、意欲、実行力を身につけた人々を世界中で実行育成すること」とされています（1975年ベオグラード憲章）。

奈良県では、平成18年度より森林環境税が導入され、その使途として森林環境教育推進事業が掲げられました。森林環境教育とは言葉の通り森林での環境教育のことで、「森林内での様々な体験活動を通じて、人々の生活や環境と森林との関係について理解と関心を深める（2012年林業白書）」教育です。

水生生物の観察

コケ植物で空気のきれいさを調べました

これまで行った環境教育プログラムの実例

森と水の源流館では、当初より川上宣言に基づき活動を行っています。その中で、川上村の有する豊富な森林資源や森とともに暮らしてきた川上村の文化や技は環境教育、森林環境教育を推進するのに大きな力となりました。形態としては行事として開催したもの、小学校～大学までの授業や講座として開催したもの、一般向けのエコツアーの延長で行ったものなど多岐に渡ります。そこで、今年度行ってきたメニューを中心に、少し紹介していきます。

行事として行ったもの

吉野川源流の原生林で学ぶ定例の「水源地の森ツアー」や、吉野川紀の川流域の自然観察を通して環境を学ぶ「吉野川紀の川しらべ隊」があります。

今年度は5月にコケ植物の分類が専門の木村が吉野山のコケ調べを通して、吉野山周辺の大気環境について推定したり、8月には谷幸三氏を講師に迎え、水生生物から水質環境を推定したりするようなワークショップを開催しました。当館の自然系、歴史系スタッフが専門領域を活かして行うもの、外部講師を招いて行うものがあります。

水源地の森ツアーでは源流の大自然を体感できます

定例の水源地の森ツアーは、吉野川源流を訪ね、人と自然の関わりの大切さや森林からの生態系サービスについて体感的に学んでいきます。

学校等と連携したプログラム

今年度も小学校から大学まで水源地の村で体験を通して森林や環境を学びたいというニーズに応えるべく、様々なプログラムを展開してきました。少人数の学校で吉野川源流の自然を学びたいという学校では、吉野川源流－水源地の森での学習を行うこともあります。アクセスのよい場所で身近な自然観察を行いたいという場合には、蜻蛉の滝周辺でのプログラムを希望される場合が多いです。基本的には、教科や講義でのねらいや達成目標などを伺って、内容、実施場所等の打合せを行い実施しています。

大学生はフィールドで学ぶ大切さを実感できます

源流でこどもたちはたくさんの発見をします

出張源流教室

当館には、例年5、10月を中心に、源流の大切さを学びに多くの小学校が来館します。しかし、源流は都市部から見れば、交通に不便なところです。時間的や距離的な制約などで源流の大切さを伝えられないのは、非常に残念なことです。そこで要望に応じて視聴覚機材を用いての授業や簡単な記念品づくりなど、可能な範囲で出張教室を行っています。

出張教室では「学べる屋台」も人気です

今後の展望

これからも源流の資源を活かして、様々な主体と連携して環境問題に取り組んでいきたいと思います。その結果、環境の諸問題の解決につながることを期待しています。環境教育を通じて新たな出会いや新しい活動が始まればいいと思います。今後ともご支援ご協力をよろしくお願いします。

（木村全邦）

その十六 『どんぐり』と磨石（すりいし）

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

森と水の源流館では、平成25年10月18日から12月16日にかけて企画展「どんぐり」を開催しました。

日本にはドングリのなる木が22種類あり、県内では20種類見ることができます。今回、自然・民俗・考古の面から人とドングリとの関係を考えてみようと、奈良植物研究会の川端一弘さんに協力をお願いして、奈良県内で見られるドングリの実・押し葉・花の写真、ドングリの木炭（備長炭・菊炭）、縄文時代のドングリ（約3000年前　奈良市中貫柿ノ木遺跡）、そして吉野町国栖で採集した磨石（すりいし）などを展示しました。

栄養豊富で保存が利くドングリは、縄文時代には主食として食べられていました。磨石は採集してきたドングリを粉末にするための石器で、石皿という平たい石とセットで使われていました。

農耕が生業の中心となった弥生時代に入ると、次第にドングリは食べられなくなっていきましたが、しばしば冷害に見舞われていた東北地方では、シタミ粉というドングリ粉の郷土食が伝わり、同様に寒冷で耕地が少ない吉野郡でもドングリ食の伝統が残りました。例えば浄見原神社（吉野町南国栖）の国栖奏では、ウグイやカエルと共にドングリ団子が供えられ、隣接する川上村東川地区でもドングリ団子が食べられていたそうです。このほかにも吉野・熊野地方各所にドングリ茶やドングリ粥の記録が残っています。

今回展示した磨石は、同時に見つかった土器から弥生時代のものと思われます。吉野郡内で見つかる弥生土器の文様や形は、奈良盆地と変わらないのですが、石包丁など稲作にかかわる石器はあまり見つかっていません。代わりに狩猟に用いた石鏃（せきぞく）（矢じり）や磨石が多く見られます（大淀町越部ハサマ遺跡・吉野町宮滝遺跡など）。このことは、農耕文化が広まった弥生時代においても、吉野郡内では縄文時代以来の狩猟採集中心の暮らしが残っていたことを示しています。

磨石は石鏃に比べればあまり目立たず、パッと見ただけでは自然石と区別つきません。しかし表面はとてもツルツルしており、美しい光沢を見せるものもあります。

昨年11月、奈良テレビのドングリ特集で、企画展「どんぐり」も取材・放送してもらいました。その際、石器を使ってドングリ粉を作る実験もされましたが、粉末にするのはとても大変だったそうです。展示したようなツルツルになった磨石は、長期間にわたり大切に使い込まれたものでしょう。

そんな磨石に触れていると、吉野山地の豊かな自然の中で、ドングリを集めていた太古の暮らしを思い描くことができます。

クヌギのドングリ

磨石

企画展「ドングリ」の様子

（参考文献）
浦西勉　1977．奈良県吉野地方のトチ・カシ・ホソの実の植生．奈良県立民俗博物館紀要第1号：1－10．奈良県立民俗博物館、大和郡山．
佐藤春夫　1936．熊野路．小山書店．東京．
川上洋一　2004．吉野川流域の弥生時代：「吉野仙境の歴史」：44～70．文英堂、京都．
野本寛一　2005．橡と餅－食の民俗構造を探る－．岩波書店、東京．

達ちゃんが語る 子どもたちに伝えたい「源流学」 ④山の神 -2

前回で「山の神」のいわれについて話したので、今回は、お祀りの仕方について話そうと思う。

「山の神」は、毎年の正月7日、6月7日、11月7日の年に3回、サカキや御神酒、洗い米などを供え、山の安全を願ってきた。正月は1年の始まりやから分かるけど、他の日はなんでこの日になったのかは、わしにもよう分からん。昔は旧暦でしとったらしい。ただ、この日だけでなく、山に入るときは、「山はじめの日」といって、必ず安全を祈願してから山に入ってきた。樹齢何百年する木には、神さんが宿るといって、神主に拝んでもらってから切ったりするし、250年ぐらいの人工林もその木を拝んでから作業に入るんや。

神主を呼ぶこともあるけど、たいがいは、わしらで祀ることが多い。お供えするものは、サカキ、御神酒、洗い米、生の魚（オカシラサバ＝腹の割いていないもの）。2礼2拍手1礼して、安全を祈るんや。それは若い衆も必ずしていて、「山入（やまい）りの行事」ともいわれている。山を敬い、安全を願う。山を敬う気持ちがほんま一番、大事なんや。しかし、その気持ちが時代とともに、だんだん失われていっているように思う。

むかしは、集落でも「山の神」を祀っとったけど、わしが住んでる柏木でももう見当たらん。そんなこともあって、今年の1月11日に、源流のことを学んどる人たちやボランティアに声をかけて、みんなで、水源地の森にある三之公の「山の神まつり」の体験を計画した。聞いて頭で知ってても、やっぱり体験することが一番やからなぁ。そうしたら、仲間の1人が、「オコゼ」を持ってきてくれた。「オコゼ」は、三之公の山の神さんである「イワナガ姫」の好物やといわれている魚で、いろんな諸説はあるが、綺麗な魚やったら醜い顔のイワナガ姫が焼きもちをやいてしまい、イワナガ姫よりぶさいくな魚でないとあかんらしい。普段は手に入る魚で代用しとるけど、今回は若い人らへ伝えたかったから、「オコゼ」をまわりしてもらえて、ほんまよかった。

このお社は、普通のと違って、ちょっと変わった形しとちょうど幹の中がすっぽり空いてた300年の天然杉の幹の部分があって、これやったら、この森の神さんが宿るお社としてええということで、作り始めたけど、えらい苦労した。縦にするとハチの巣箱になるから横にして、屋根は銅板で葺いた。みんなでお金を出して買ってきたら、それでええんかもしれんけど、みんなで作った社やから意味があるんやと思う。祝詞も、神主さんにつくってもらってあるものを、毎回、わしが祝詞をあげてるんやで。今回は大勢の人が来てくれたから、いつもより張り切ったけどなぁ。お供えは、三宝にのせて、右から野菜、魚、洗い米・御神酒、ごく（餅のこと）、乾物・果物と5つ並べる。そして忘れたらあかんのが、ケヤキで作った男性のシンボル。女の神さんやからお供えされてるんやと思うけど、知らるのも特徴や。平成14年に水源地の森を整備したときにつくったんや。

水源地の森では、小学生から企業までいろんな人が来るけれど、山に入る前は必ずここで祈願してから入るようにと言ってる。今の人はどう思とるか分からんけど、わしは神さんはいると思う。山仕事をしてたら、ちょっとしたことで「よう命を落とせんだなぁ」と思うことがあるんや。助けてもらった、守ってもらったと思うんや。古来から日本人は神さんをよりどころにしてきた。わしは子どものころから山で過ごし、仕事をしてきた。山のふところで暮らしてきた。森の生活で文化が生まれてきた。だから古木や巨木は、魂が宿っとるから、やっぱり切れんのや。息子やったら、仕事として引き受けるんかもしれんけど、わしには無理や。切ってしもたら再生するのに300年～500年はかかる。自然をないがしろにしたら、大変なことになる。昔の人が大事にしてきたことは、ほんまに大事なことや。前回も言ったが、「山の神」さんは山仕事に関わっている人だけの神さんでない。山で暮らす人たちの神さんでもあるとわしは思っている。

※連載では、「聞き書き」でコミュニティライターの西久保智美が担当します。

源流に咲く春の妖精 ～ Spring ephemeral ～

（スプリング　エフェメラル）

早春に咲く“春の妖精”と呼ばれる小さな植物たちがいます。彼らは私たちを楽しませるために早春に美しい花をいっせいに咲かせるわけではありません。彼らなりのしたたかな戦略や源流の村を彩る彼らを紹介します。

木村　全邦（森と水の源流館）

1．春の妖精

暖かい日差しが感じられるようになった早春の森で、一瞬の輝きを見せる小さな植物たちがいます。彼らはスプリング・エフェメラルと呼ばれ、ほとんどが小さな草本です。「ephemeral（エフェメラル）」は日本語に訳すと「はかない」「短命の」を意味します。「ephemera（エフェメラ）」が昆虫のカゲロウのことですから、カゲロウの命のようなあっという間のはかなさを表現しています。スプリング・エフェメラルをそのまま直訳すると「春のはかないもの」となります。単に「春植物」とも訳しますが、「春の妖精」とはよく言ったものです。早春の林床に一瞬だけ輝く彼らの姿は、まるで妖精が踊っているように美しいものです。

とても明るい早春の吉野川源流ー水源地の森
（2012年2月13日）

2．妖精のすみかとくらし

彼らが見られる森は落葉広葉樹林です。簡単にいうと、秋になると紅葉が美しいカエデやブナなどが主役の森です。温度帯でいうと、常緑照葉樹が生えているところ（西日本では神社の鎮守の森のような暗い森のところ）よりも寒冷な暖温帯から冷温帯くらいまでに広がっています。川上村の源流の森では、沢沿いにトチノキ、サワグルミ、シオジ、カツラなどが優先し、それより高い標高では、ブナ、ミズナラなどが見られるようになります。ちょうどその辺りまでが、彼らの住む落葉広葉樹林に当たります。早春の落葉広葉樹林は、当たり前ですが、木々の葉っぱが落ちてしまっているので、春の暖かい日差しが林床までいっぱい届きます。彼らは、背の高い草本が生えてきたり、木々が芽吹いて林冠を覆ったりして森が暗くなる前の一瞬のすき間を利用して、春の暖かい日差しを独占して成長し、花を咲かせ、種を付けます。本格的な春がやってくる頃には、お花はおしまいで、葉だけになっていることがほとんどです。源流の森では、２月下旬くらいから４月下旬くらい（ちょうど４月の水源地の森ツアー頃）まで春の妖精が踊っているのを観察することができます。

彼らの花粉を運ぶのは虫です。小さな体に時に大きくよく目立つ花を付けるのは、まだ虫の少ないこの時期に目立たせて受粉のチャンスを多くするためだと言われています。じっと、花をながめていると虫が飛んでくることもよくあります。

定点的に見た早春の森（左）と夏の森（右）。夏の森は木々の葉に日光が遮られているのがわかる。

3．源流の春の妖精の楽しみ方

川上村でも早春になるとあちこちに春の妖精が現れます。道端に現れるものもいますし、森の奥にだけひっそりとしているものもいます。いずれにせよ、足元の小さな植物は、それを見る気になってゆっくりと歩き、時に立ち止まり、あるいは、時にじっと目をこらさないと気づかずに通り過ぎてしまうことも多いでしょう。吉野川紀の川源流の川上村に春を告げる彼らを少しここに紹介します。

最近では、「花が美しい」とか「めずらしい」という理由で持って帰って楽しもうとしたり、山取りしたものを購入したりする人が多く、絶滅の大きな原因となっているのは悲しいことです。彼ら春の妖精にも森の中で大きな役割があります。彼らがいなくなると困るのは、森の生き物だけではなく、つながりの中で生きている人間だって困るのです。

春の妖精の美しさは、春の森で風を感じ、鳥の声やせせらぎなどのハーモニーとともに愛でてこそ、その意味を感じられるものです。川上村の早春をぜひ“現地でゆっくり”とお楽しみ下さい。

ヒトリシズカ
（センリョウ科）

ショウジョウバカマ
（ユリ科）

ジロボウエンゴサク
（ケシ科）

ミヤマキケマン
（ケシ科）

ムラサキケマン
（ケシ科）

ニリンソウ
（キンポウゲ科）

コガネネコノメ
（ユキノシタ科）

タチネコノメ
（ユキノシタ科）

ツルネコノメソウ
（ユキノシタ科）

ちょうど、オドリバエのなかまが訪花していました。まだ日本では記録のない *Iteaphila* 属の１種かもしれない（三枝豊平九州大学名誉教授私信）とのこと。地面にはいつくばっての春の妖精の観察には、こんな楽しい発見もあるかもしれません。

コチャルメルソウ
（ユキノシタ科）

カテンソウ
（イラクサ科）

ミヤマカタバミ
（カタバミ科）

タチツボスミレ
（スミレ科）

スズシロソウ
（アブラナ科）

ユリワサビ
（アブラナ科）